

安心できる場所がありますか？

岩河 敏宏

詩編4編1節, 8節 (新改訳)

1 私が呼ぶとき、答えてください。私の義なる神。

あなたは、私の苦しみのときに

ゆとりを与えてくださいました。

私をあわれみ、私の祈りを聞いてください。

8 平安のうちに私は身を横たえ、すぐ、眠りにつきます。

主よ。あなただけが、

私を安らかに住まわせてくださいます。(下線部;筆者)

唐突な質問ではありますが、皆様にとって心身とも安らげる解放される場所がありますか？

我が家では、子どもたちも成長して共通の会話をする機会が年毎に減少する中で、家族旅行の計画時には全員が絡みます。旅行中の事柄は、貴重な時間として記憶されますが、この幸いな時は、“非日常”です。有意義な時ですが、私たちが“日常”欲している安心できる場所ではありません。旅先から帰宅した時に、自分が定位置にしている場所で一呼吸をついた際に安堵感を強く実感した、という経験をされた方は多くおられると思います。

冒頭に紹介した詩編4編では、“安心できる場所”について、幾つかの点を記しています。詩編の著者は、第一に「ゆとりが与えられる」(1節)ことを挙げています。

人は苦しみの中にある時は、心にゆとりをもつことができなくなり、つい「むなしいものを愛し、まやかしものを慕い求め」(2節)てしまいます。つまり、一時の不安を打ち消すもの、気を紛らわすものを求めて、根本から逃げてしまう弱さがあります。しかし、神は苦しみの中にある私たちに、ゆとりを与えて下さる方だと告白しています。第二に、「身を横たえて、眠りにつく」(8節)という表現がありますが、これは、神との正しい信頼関係にある人が持つ感覚だと言えます。苦しみや悩みの中にある時、不安と恐れゆえに、安眠ができずに心身とも疲れてしまう人が多くいますが、むしろ普通だと感じます。ではなぜ、身を横たえて眠りにつくことができるのでしょうか。それは、第一の「ゆとり」と密接に関連しています。「ゆとり」は、自分ではなく、「主が、ご自分の聖徒を特別に扱われる」(3節)ことを知る時に、苦しい状況にある自分が護られるとの実感からきます。それは、物質的、金銭的なゆとりではなく、「存在のゆとり」とも言うべき、神に愛されているという「特別待遇の自覚」によるものだと思います。しかも、それは逆境の中でこそ確認されるものだと信じます。「ゆとり」-「特別待遇の自覚」-「安心感」この一連によって、安心できる場所が生まれるのでしょう。

様々な苦労や悩みの中で生活する人にとって、教会が安心できる場所となりたい。(※節は、全て新改訳)